

国際交流事後活動ニュース（特別号）

MACROCOSM



Contents

平成18年度内閣府青年国際交流事業参加青年募集特集…	2
平成17年度「21世紀ルネッサンス青年リーダー招へい」事業…	14
ターニングポイント…	19
第7回「東南アジア青年の船」事業25周年同窓会…	22
第2回日韓交流連絡会議…	24
スマトラ島沖地震 津波被災地のスリランカからの報告…	26
お知らせ…	29

マクロコズム
2006.1 vol.68

(財) 青少年国際交流推進センター

「国際青年育成交流」事業

International Youth Development Exchange Program (INDEX)

皇太子殿下の御成婚を記念して平成6年度から開始された本事業は、今回で12回目を迎え、本年は、9月4日～9月28日、チリ、ドミニカ共和国、ハンガリー、ヨルダン、ミャンマーの5か国に派遣されました。各団は、団長、副団長、団員12名の合計14名で構成され、それぞれの訪問国で表敬訪問、施設見学、青年との交流、ホームステイなど、様々な活動を行いました。

「青年海外派遣」

ドミニカ共和国



地球の裏側で考えたこと

第11回「国際青年育成交流」事業（チリ）参加青年
桑原 真哉



▲ 孤児院の子どもたちと

一同私を非常に歓迎してくれました。

朝から晩までチリの家庭料理や飲み物、そして「クエッカ」と呼ばれるチリの伝統的な踊りを楽しみながら交流したことは忘れられません。

チリ共和国派遣期間中で最も印象的な経験はホームステイでした。ホームステイ初日はチリの独立記念日にあたる日で、本来なら、大切な家族や親戚と共に過ごす週末であるにもかかわらず、「日本人の家族」として家族

そして、このホームステイ時に覚えた踊りを帰国後、天皇皇后陛下下拝謁時に披露したことも貴重な体験となりました。

現代は、マスメディアの発達により地球の裏側に位置する南米チリ共和国のような国のことでも、情報としては瞬時に手に入れられる時代ですが、「真の国際理解」というものは実際に当地を訪れ、五感を最大限に利用しながら、現地で体験を重ねなければならないということをこの事業を通じて痛感しました。

主な滞在日程

9月5日	サンティアゴ着、在チリ日本大使館表敬
9月6日	チリ青年庁表敬、大使館、JICA、日本企業および日本人学校職員との交流
9月10日	内閣府「国際青年育成交流」事業参加者との市内視察
9月12日	ラ・セリナ市に飛行機で移動。市内視察
9月13日	地元小学校、大学を訪問
9月15日	ホタテ貝養殖場(トンゴイ湾)視察、北カトリック大学訪問
9月16日	コキンボ市視察
9月17～19日	ホームステイ
9月20日	JETRO表敬
9月21日	エル・テニエンテ・セウエル鉱山(世界遺産)訪問
9月24日	ワイナリー視察

ヨルダン



マジャールと混ざ〜る ~Be a Bridge of a Friendship for Better Future~

第11回「国際青年育成交流」事業(ハンガリー)参加青年一同

私たちが訪れたハンガリー国は、現地語で「マジャール」といいます。ドナウの真珠とも言われる首都ブダペストの美しさは、到着初日から私たちを魅了し、絵葉書には収まりきれない美しい街並みには、ため息が出るほどでした。

私たちは各訪問先でいろいろなお話を聞き、そして熱く語り合いました。同年代の青年たちとの交流では、お互いの日常的な生活に関する話から、社会・政治についての深い話まで幅広く交わ

すことができました。ハンガリー人は日本人と共通する点が多く、少しシャイだけれど目をじっと見て話し、別れ際には相手が見えなくなるまで手を振る、温かい心を持った人々という印象が残りました。また、日本への興味や関心も高く、日本紹介パフォーマンスの「よさこい」は、各地でアンコールをもらうほど盛り上がりました。

そして、ハンガリーでの食事はどれもボリューム満点！パイオリンやチェロの優雅な演奏を聞きながら有名な貴腐ワインを堪能し、帰国する頃にはみんなふっくらと……。

ハンガリー団はそれぞれに個性的なメンバーの集まりでしたが、

私たちは互いに違うからこそ団結し、1人では成し遂げられないことをやり遂げることができました。私たちはこの派遣事業で得た体験をできるだけ多くの人に伝え、日本とハンガリーが「混ざる」ための、未来へのかけはしになっていきたいと思っています。



▲ エステルゴム大聖堂にて

主な滞在日程

9/6	新聞社、教育省訪問
9/9	日系企業アルパイン訪問
9/11	世界遺産ホロkker訪問
9/13	エステルゴム訪問
9/14	Graphisoft社訪問
9/15	ブダペスト工科大学、カーロリ大学訪問
9/16~18	ホームステイ
9/19	ハンガリー日本友好協会訪問
9/25	ハンガリーTV局、国会議事堂訪問、オペラ鑑賞

ミャンマー



「日本・中国青年親善交流」事業

◆**好朋友 一起走吧!**◆ (今年度派遣団のスローガン: 日本語訳: 「友よ一緒に行こう!」)

「日本・中国青年親善交流」事業(日本青年海外派遣)に参加した日本参加青年30名は、北京・西安・フフホト・ハルビン・大連の各都市を訪問し、施設訪問や交流活動を行いました。今年は戦後60年にあたりますが、この訪問が日中友好に寄与し、今後、参加青年が中国との交流を続けていくことを期待します。

the People's
Republic of
China



愛する朋友(友達)

平成17年度「日本・中国青年親善交流」事業(第27回)参加青年
松本 麻里

中国で過ごした19日間は一生忘れることのない素晴らしい毎日だった。なぜなら、私は現地で多くの方々に出会い、かけがえのない朋友ができたからである。

様々な交流の中で、西安外事学院の学生さんとの懇談会が私にとって思い出深い。この懇談会で、中国側の学生が「石炭工業都市生まれの私は、今まで青空を見たことがない」と中国の環境汚染の現状を切実に語ってくれた。私は、彼女の話に大きなショックを受けつつも、皆で丸となって具体的な環境改善策を話し合った。その真剣な話し合いを通して、私たちは彼女が抱えている問題は決して一都市にとどまらず、中日両国に深くかかわるものであると強く感じた。なぜなら、環境問題の解決に向けて互いに協力していくことが、両者のさらなる発展と友好につながるからである。

だからこそ、私はこれからも同志である団員や中国の朋友達と密に情報交換をしながら、心の交流を大切にしていきたい。



◀「千羽鶴作り」

9月10日	出発	
9月10~14日	北京	施設や文化遺産見学(北京市都市計画展覧館・天壇公園・中国戯曲学院・万里の長城・天安門広場)、企業見学(中青網・燕京ビール工場)、表敬訪問(人民大会堂・在中国日本大使館)、北京外国語大学学生との交流会
9月14~17日	西安	文化遺産見学(兵馬俑・大雁塔・西安城壁)、西安外事学院学生との交流会
9月17~21日	フフホト	施設や文化遺産見学(大召寺・内蒙古博物館)、企業見学(如意開発区、伊利実業集団、TCL集団)、伝統文化体験(乗馬、モンゴル相撲、パオ宿泊)
9月21~26日	ハルビン	施設見学(ソフィア聖堂・中日新潟公園・東北虎林園・雷峰小学校など)、企業見学(三精製薬グループ会社・ハイテク技術開発区)、表敬訪問(黒龍江省人民政府)、ホームステイ
9月26~28日	大連	施設見学(星海公園)、企業見学(大連経済技術開発区・大連市商業区・日系企業トステム)
9月28日	帰国	

「日本・韓国青年親善交流」事業 the Republic of Korea

今年度の「日本・韓国青年親善交流」事業(日本青年海外派遣)は、日本全国から29名の代表青年が参加しました。日韓国交正常化40周年にあたる記念すべき年に、青年たちはソウルを始め釜山、慶州など主要都市で企業訪問、青年交流、文化交流、ディスカッション、ホームステイなど多くのプログラムを体験してきました。

平成17年度「日本・韓国青年親善交流」事業(第19回)参加青年
笹村 健児

2005年3月に約半年間の春川(チュンチョン)での交換留学を終え、帰国し、今後どのようにして韓国と向き合うか考えていた矢先、飛び込むようにしてこの事業に応募いたしました。

全国から選抜され、それぞれの「韓国への思い」を胸に集まったメンバー達と過ごした日々は、事前研修等で飛び交う意見や情報交換、時には熱い思いを語り合うことにより、さらに、あらゆる角度から韓国を知ることとなり、日韓および国際交流の一端を担う貴重な経験を積むことができたのです。

派遣中の15日間は国家機関・大学・企業・工場への訪

日程	スケジュール
9月1日(木)	出発
9月2日(金)	在韓国日本大使館表敬訪問(広報文化院) 青少年委員会表敬訪問
9月5日(月)	日韓の歴史認識の違いについての講義、討論会
9月5日(月)~ 7日(水)	国立中央青少年修練院(NYC)入所
9月8日(木)	来蘇寺(ネソサ)のお寺体験プログラム参加 ホームステイ対面式(釜山大学校/釜慶大学校) ホームステイから戻り 慶州(キョンジュ)へ移動 国立慶州博物館、天馬塚、瞻星臺、皇龍寺址訪問
9月9日(金)~ 9月11日(日)	
9月13日(火)	DAUM訪問 韓国調理科学高校にて交流会 NANTA(ナンタ)観覧
9月14日(水)	サムスン電子 水原(スウォン) 事業場訪問
9月15日(木)	帰国



問をはじめ歴史的建造物の見学など、様々な経験をさせていただきました。この派遣団に参加できたことへの誇りと喜びは計り知れず、自分にとっては新たな出発点を見つけることとなりました。

僕たちのスローガン「相思相愛ウリミレ(우리 미래)」を胸に刻んで、自分の人生の糧としていきます。



臨津閣にて



韓国調理科学高校での交流会

第32回「東南アジア青年の船」事業 The Ship for Southeast Asian Youth Program 世界への扉はここに

「東南アジア青年の船」事業は、昭和49年のインドネシア、マレーシア、フィリピン、シンガポール及びタイ各国と日本との首脳会談による共同声明に基づき、アセアン諸国と我が国による青年国際交流の共同事業として発足したものです。昭和60年度からはブルネイ・ダルサラーム、平成8年度からはベトナム、平成10年度からはラオス、ミャンマー、平成12年度からはカンボジアを加え、これらアセアン諸国の協力のもと、日本政府が実施しています。

第32回を迎えた今回は、10月31日に日本を出航し、マレーシアでアセアン各国青年が参集して乗船した後、アセアン5か国に寄港し、最後に日本で活動を行い12月20日に終了しました。



第32回「東南アジア青年の船」事業 参加青年
ユース・リーダー 米井 慎一

私は昨年「東南アジア青年の船」に参加し、日本とアセアン10か国から選抜された青年約330人と共にアセアン5か国と日本での活動を行いました。文化や宗教、価値観などが違う青年たちとの共同生活は、とても新鮮で毎日が発見の連続でした。どの活動も印象深かったのですが、特にすばらしかったのがディスカッションです。

航路及び寄港地

10/31	東京(日本) 出航
11/8 ~ 11/13	ポートクラン(マレーシア)
11/16 ~ 11/20	バンコク(タイ)
11/23 ~ 11/26	ホーチミン(ベトナム)
11/28 ~ 12/1	ムアラ(ブルネイ・ダルサラーム)
12/4 ~ 12/7	マニラ(フィリピン)
12/12 ~ 12/20	日本国内活動

マレーシア寄港中、代表団が航空機で
プノンベン(カンボジア)を訪問(11/10~11/11)



ディスカッションはテーマごとに分かれ、タイでの課題別視察を含め十数日間でグループディスカッションから発表まで行いました。私は「学校教育」のテーマを選択し、学校教育でリーダーシップをいかにして育むかについて討議しました。リーダーシップとは何なのかを定義し、今後各国でいかにしてリーダーシップを育てていくのか話し合いましたが、議論が白熱して食事をすることを忘れてしまうこともありました。討議を通じて、アセアンと日本で自分たちがリーダーを目指すだけでなく、その次の世代を育む使命があることを確認し合いました。

内閣府の青年国際交流事業のすばらしさは、事業終了

後の「つながり」にあると思います。日本を含めた11か国の青年と共に過ごした51日間は一日一日、一瞬一瞬がかけがえのないものでした。遠く離れて住んでいても、

参加青年は熱い心でつながっています。この事業で得られた絆は一生続くものと思っています。今度はみなさんの番です。さあ、世界への扉を開けてください！



寺下英明アドバイザーの基調講演



フィリピン参加青年のパフォーマンス(フェアウェル・パーティー)



寄港地(マレーシア)で



地元青年と太鼓体験
(地方プログラム/愛知県)



ディスカッションの様子



ディスカッションの発表

第18回「世界青年の船」事業 The Ship for World Youth Program

「世界青年の船」事業は、日本参加青年約120名と世界12か国からの外国青年約140名が、約2か月間にわたり「世界青年の船」に乗船し、生活を共にするなかで、船上及び訪問国において各種の交流活動を行う事業です。第18回「世界青年の船」では、チェンナイ(インド)、モンバサ(ケニア共和国)、ポートルイス(モーリシャス共和国)を訪問する予定です。

第11回「世界青年の船」事業 参加青年
第18回「世界青年の船」事業 サブ・ナショナル・リーダー
寺西 一章

「世界青年の船」事業は、言葉も文化も宗教も習慣も異なる13か国約260名の参加青年が43日間の船内での共同生活を通じて、他者を知り、そして自己を知るプログラムです。異文化理解と他者を認識することから自分を見つめ直し、その共通点、相違点に気付く。それを理解した上で、そういった人々とどのように過ごしていくのか、どのようにふるまえば、自分の個性を活かすことができるのかを考える。まさに「地球人」としての感覚を養う絶好の機会なのです。

今回私はこの事業に120名の日本参加青年のサブ・ナショナル・リーダーとして参加させていただくことになりました。「世界船の青年」事業の参加青年は、本当に

個性豊かで才能あふれる集団であり、宝の山だと思っています。今回はこの集団の中で自らが「リーダー」としてどのような行動をとることが、この数多の宝石の個性を引き出し、彼らの成長につながっていくのか。そんな「リーダーとしての在り方」を追求していきたいと考えています。そして、私の特性に合った私なりのリーダーシップ論を構築し、実社会の場でも役立てていきたいと思っています。

この記事を読んでいる皆さんが読んでくださっている頃には、私たちは日本を出航し、インド、ケニア、モーリシャスへの航海を続けています。参加青年各自が帰国後どのような報告を皆様にできるのか、楽しみにしててください。

スケジュール

国内プログラム	
1月10日	外国青年来日
1月11日～19日	国内プログラム(都内視察・歓迎会・課題別視察・地方プログラム・出航前研修など)
運航	
1月19日	出航 晴海(日本)
1月26日	シンガポール ※給油・給水
1月30～31日	チェンナイ(インド)
2月7～9日	モンバサ(ケニア共和国)
2月13～14日	ポートルイス(モーリシャス共和国)
2月22日	シンガポール ※給油・給水
3月2日	帰港 晴海(日本)



参加国

オーストラリア連邦、バーレーン王国、ブラジル連邦共和国、カナダ、ギリシャ共和国、インド、日本国、ケニア共和国、モーリシャス共和国、モロッコ王国、スウェーデン王国、トンガ王国、アラブ首長国連邦

国内プログラム

歓迎レセプション 1月11日(水)



猪口邦子内閣府特命担当大臣によるあいさつ



山谷えり子内閣府大臣政務官とアラブ首長国連邦の青年たち



外国参加青年の紹介(ケニア)



外国参加青年の紹介(トンガ)

課題別視察

1月12日(木)

課題別視察では、外国青年が6つのコース(経済、教育、環境、国連、ボランティア、青少年育成)に分かれ、各コースのテーマに沿った視察先を訪れました。この課題別視察は船内で行われる「コース・ディスカッション」と連携しています。



【ボランティアコース】災害支援時の装備について学ぶ(日本赤十字社本社)



【国連コース】
国際連合世界食糧計画(WFP)
日本事務所
援助関係官
伊藤礼樹氏による
基調講演



【国連コース】
各グループでのケーススタディ

内閣府青年国際交流事業一覧

事業名	事業の概要
国際青年育成交流	<ul style="list-style-type: none"> ● 皇太子殿下の御成婚を記念して、平成6年度から開始 ● 日本青年の海外派遣及び外国青年の日本招へいの2つの事業から構成 ● 当時皇太子殿下であられた今上陛下の御成婚記念事業として昭和34年度から開始された「青年海外派遣」事業及び昭和37年度から開始された「外国青年招へい」事業を発展的に改組 ● ボランティア活動、福祉活動、伝統文化等の共同体験交流を中心とした拠点滞在型の国際交流活動を実施 ● 「討議セッション」では、国際青年育成交流事業（外国青年招へい）の一環として、招へいした外国青年と日本青年とが率直に意見を交換 ● 日本青年約60名を世界5か国に20日間程度派遣、外国青年約100名を世界12か国から20日間程度招へい
日本・中国青年親善交流	<ul style="list-style-type: none"> ● 日中平和友好条約の締結を記念し、日本と中国両国政府の共同事業として昭和54年度から開始 ● 日本青年約30名を20日間程度派遣、中国青年約30名を20日間程度招へい
日本・韓国青年親善交流	<ul style="list-style-type: none"> ● 昭和59年の日本・韓国共同声明及び昭和60年の日韓国交正常化20周年を踏まえ、日本と韓国両国政府の共同事業として昭和62年度から開始 ● 日本青年約30名を15日間程度派遣、韓国青年約30名を15日間程度招へい
世界青年の船	<ul style="list-style-type: none"> ● 明治百年事業の一つとして昭和42年度から実施してきた「青年の船」事業を発展的に改組し、昭和63年度から開始 ● 日本青年約120名と訪問国を含む世界各国12か国の青年約140名が45日間程度船内で共同生活をしながら、「青年の社会参加」といった共通のテーマに基づく「コース・ディスカッション」、クラブ活動など各種の多国籍間交流活動を行うとともに、訪問国では現地青年との交流活動を実施 ● 北・中南米及びオセアニア方面と南西アジア、中近東、アフリカ方面を隔年で訪問
東南アジア青年の船	<ul style="list-style-type: none"> ● 日本とASEAN各国との共同声明に基づいて、昭和49年度から開始 ● 日本青年約40名とASEAN10か国の青年約300名が50日間程度船内などで共同生活をしながら、ASEAN各国を訪問

御意見、御質問などがありましたら、下記にお問い合わせください。

内閣府政策統括官（共生社会政策担当）付国際交流第1担当

〒100-8970 東京都千代田区霞が関3-1-1 中央合同庁舎第4号館
TEL (03) 3581-1181 (直通) FAX (03) 3581-1609

ホームページ <http://www8.cao.go.jp/youth/koryu1.htm>



日本参加青年募集概要

	航空機による青年海外派遣		世界青年の船		東南アジア青年の船
訪問国	バルト三国 (エストニア、ラトビア、 リトアニア)、 カンボジア、 ドミニカ共和国、 ミャンマー、 チュニジア (うち1か国(バルト 三国の場合は3か国))	中 国 韓 国	オーストラリア、ソロモン諸島、トンガ (中近東、アフリカ、ヨーロッパ、北米、中米、 南米、オセアニア等地域の青年約140 人と共に船内で共同生活をしながら各 国を訪問)		ブルネイ、インドネシア、マレーシア、 シンガポール、ベトナム (ASEAN10か国(カンボジア、ラオス、 ミャンマー、フィリピン、タイを含む。) の青年約300人と共に船内での共同 生活などをしながら各国を訪問)
実施時期 (期間)	平成18年 8月～9月	平成18年 9月		平成19年1月～3月	平成18年10月～12月
	20日間程度	20日間程度	15日間程度	45日間程度	50日間程度
募集人員	各12人	一般団員：中国 25人 韓国 25人 渉外団員：各2人		約120人	約40人
資格要件	国籍	日本国籍を有すること			
	年齢	18歳～30歳 (昭和50年4月2日～ 昭和63年4月1日生まれ)	一般団員：18歳～30歳 (昭和50年4月2日～昭和63年4月1日生まれ) 渉外団員：おおむね25歳～35歳	18歳～30歳 (昭和50年4月2日～昭和63年4月1日生まれ)	18歳～30歳 (昭和50年4月2日～昭和63年4月1日生まれ)
	青少年活動等	帰国後もその経験をいかして国際交流活動、青少年活動等を活発に行える者			
	語学力など	一般的な教養があり、交流活動を円滑に行える英語力を有すること。	一般団員：訪問国の公用語により簡単な日常会話ができる者が望ましい。 渉外団員：訪問国の公用語で通訳を円滑に遂行できること。	一般的な教養があり、交流活動を円滑に行える英語力を有すること。	
研修	その他	国の行う同種の事業に参加したことのある者は応募できません(ただし、渉外団員への応募はこの限りではない)。			
	事前	7月上旬の6日間		9月中旬の6日間	8月上旬の6日間
	出発前	出発直前の2日間		出航直前の5日間	出航直前の2日間
個人負担額	帰国後	帰国直後の2日間		—	帰国直後の2日間
	個人負担額	約8万円		約20万円	
応募窓口	〔内訳〕研修費(事前、出発前、帰国後)、船内供食費(船事業のみ)、渡航手続費用など。 ※上京・帰郷旅費、旅行保険料等は、別途負担となります。				
募集時期	各都道府県の青少年対策主管課(室)〔参加申込書、作文等を提出していただきます。〕				
募集時期	おおむね2月～3月中の予定(締切り期限の早い都道府県もありますので、お早めに御確認ください。)				

* 最終選考を兼ねます。

* 訪問国及び日程は諸事情により変更になることがあります。最新の情報はホームページで確認してください。

平成18年度内閣府青年国際交流事業各都道府県連絡先一覧

都道府県	主管課等名	電話番号 (*直通)	募集期間	中間選考日	
1	北海道	知事政策部知事室国際課	011-231-4111 (21-229)	2/1 ~3/24	4/3~14
2	青森県	環境生活部青少年・男女共同参画課	017-734-9224 *	2/1 ~3/20	4/8
3	岩手県	環境生活部青少年・男女共同参画課	019-629-5348 *	2/1 ~3/31	4/14
4	宮城県	環境生活部青少年課	022-211-2558 *	2/1 ~3/31	4/14
5	秋田県	生活環境文化部県民文化政策課	018-860-1552 *	3/1 ~3/31	4/15
6	山形県	文化環境部女性青少年政策室	023-630-2727 *	2/10~3/31	4/15
7	福島県	生活環境部県民環境総務領域	024-521-7187 *	2/20~3/20	4/8
8	茨城県	知事公室女性青少年課	029-301-2183 *	3/1 ~3/31	4/16
9	栃木県	生活環境部女性青少年課	028-623-3075 *	2/1 ~3/3	3/15
10	群馬県	保健・福祉・食品局青少年こども課	027-226-2628 *	3/1 ~4/7	4/11~17
11	埼玉県	総務部青少年課	048-830-2905 *	2/15~3/31	書類選考
12	千葉県	環境生活部県民生活課	043-223-2330 *	2/27~3/28	4/12
13	東京都	教育庁生涯学習スポーツ部社会教育課	03-5321-1111 (53-862)	2/6 ~3/10	書類選考
14	神奈川県	県民部青少年課	045-210-1111 (3846)	3/1 ~3/23	4/9
15	山梨県	企画部県民室青少年課	055-223-1357 *	2/1 ~3/10	3/25
16	新潟県	福祉保健部児童家庭課	025-280-5214 *	2/20~3/24	4/13
17	富山県	厚生部児童青年家庭課	076-444-3136 *	2/27~3/31	4/16
18	石川県	観光交流局国際交流課	076-225-1381 *	2/1 ~3/24	4/2
19	福井県	教育庁青少年育成課	0776-20-0296 *	2/15~4/6	4/16
20	長野県	教育委員会文化財・生涯学習課	026-235-7439 *	3/1 ~3/31	書類選考
21	岐阜県	地域県民部県民生活局青少年室	058-272-1111 (2422)	2/8 ~3/24	4/13
22	静岡県	教育委員会青少年課	054-221-3312 *	3/1 ~3/28	4/8
23	愛知県	県民生活部社会活動推進課	052-954-6175 *	2/1 ~3/20	書類選考
24	三重県	生活部青少年育成室	059-222-5986 *	2/20~3/20	3/28
25	滋賀県	政策調整部青少年室	077-528-4661 *	2/1 ~3/31	4/16
26	京都府	府民労働部青少年課	075-414-4301 *	3/1 ~3/24	4/11
27	大阪府	生活文化部子ども青少年課	06-6941-0351 (4844)	2月上旬~3/24	4/7
28	兵庫県	県民政策部県民文化局青少年課 (財)兵庫県青少年本部事業推進部	078-362-3143 * 078-360-8581 *	2/1 ~3/24	4/9
29	奈良県	福祉部こども家庭局青少年課	0742-27-8608 *	2/1 ~3/31	書類選考
30	和歌山県	環境生活部共生推進局青少年課	073-441-2503 *	2/1 ~3/10	3/19
31	鳥取県	企画部協働推進室	0857-26-7076 *	2月上旬~3/31	4/9
32	島根県	環境生活部文化国際課	0852-22-5020 *	2/10~3/31	4/15
33	岡山県	生活環境部青少年課	086-226-7315 *	2/10~3/31	書類選考
34	広島県	環境生活部青少年室	082-228-9335 *	3/6 ~4/5	4/13
35	山口県	環境生活部県民生活課	083-933-2634 *	2/20~3/27	4/10~16
36	徳島県	県民環境部県民環境政策課	088-621-2204 *	2/10~3/31	4/16
37	香川県	総務部青少年・男女共同参画課	087-832-3195 *	3/1 ~4/5	4/16
38	愛媛県	県民環境部県民協働局県民活動推進課	089-912-2415 *	2/13~3/31	4/14
39	高知県	文化環境部国際交流課	088-823-9605 *	2/1 ~3/31	4/7
40	福岡県	生活労働部青少年課	092-643-3387 *	2/20~3/31	4/16
41	佐賀県	くらし環境本部こども課	0952-25-7382 *	3/1 ~3/31	4/8
42	長崎県	教育庁生涯学習課	095-894-3365 *	3/1 ~3/31	4/10~14
43	熊本県	環境生活部交通安全・青少年課	096-333-2294 *	2/24~3/24	4/7
44	大分県	生活環境部青少年・学事課	097-536-1111 (3076)	1/16~3/31	4/15
45	宮崎県	地域生活部青少年男女参画課	0985-26-7041 *	2月上旬~3/31	4/14
46	鹿児島県	環境生活部青少年男女共同参画課	099-286-2557 *	3/1 ~3/31	4/15
47	沖縄県	福祉保健部青少年・児童家庭課	098-866-2174 *	3/1 ~4/7	4/14~17

※ 募集の期間及び中間選考日は予定です。(詳しくは、各都道府県庁の青少年対策主管課(室)までお問い合わせください。)

国際青年育成交流事業討議セッション(第4回)参加者募集

I 概要

1 目的

国際青年育成交流事業(外国青年招へい)のプログラムの一環として、世界12か国から招へいた外国青年と、国際的な問題に関心の深い日本青年とが、分野ごとのコースに分かれて率直な意見交換を行うことにより、それぞれの分野について、日本独自の考え方、あるいは、全世界で通用する考え方がどのようなものかという認識を深め、国際的対応力を身につけることを目的とする。

2 事業の概要

(1)開催期間 平成18年7月11日(火)から7月15日(土)までの5日間

(2)会場 (独)国立オリンピック記念青少年総合センター(〒151-0052東京都渋谷区代々木神園町3-1)

(3)参加者

ア 日本青年 約60名

イ 外国青年 約100名(「国際青年育成交流」事業(招へい))に参加している12か国の青年

(4)プログラム内容

分野別に分かれたコースごとのディスカッションを中心として、それぞれの分野の知識を深めるとともに、異文化を理解する。同時に、プログラムを通してディスカッションの進め方やコミュニケーションの技術、発表方法などを身に付ける。

◆日程◆

7月11日(火)	日本参加青年オリエンテーション、ディスカッション講座、ディスカッション準備
7月12日(水)	外国青年との交流会、コース別ディスカッション
7月13日(木)	コース別活動
7月14日(金)	コース別ディスカッション、発表会準備
7月15日(土)	発表会、修了式

(5)分野 ①環境 ②情報 ③企業の社会貢献
④教育 ⑤ボランティア ⑥伝統文化

3 経費

(1)事業中の宿泊料、食費、移動費などの経費は内閣府が負担する。

(2)事業に参加するための会場までの交通費は、参加青年本人の負担とする。

II 募集について

1 応募資格

(1)年齢 20歳～35歳程度

(2)心身の状況 心身が健康で協調性に富み、開催国参加青年としての自覚を持って円滑なプログラム運営に協力できること

(3)知識及び経験 選択した分野について、討議可能な知識、経験を有すること

(4)語学力 ディスカッション可能な英語力を有すること

(5)事業全日程への参加 5日間の全日程に参加できること

※平成18年度に内閣府が実施する他の青年国際交流事業に参加申込みをした者は応募可能。

2 欠格事由

内閣府の行う青年国際交流事業に参加したことがある者は応募できない。

3 募集人員 60名

4 共通言語 英語

5 募集方法

(1)提出書類

ア 参加申込書 1編

(内閣府のホームページからダウンロード可能。)

<http://www8.cao.go.jp/youth/koryu1.htm>

イ 作文 2編

a 英作文 志望動機(600～800word)

b 和作文 選択した分野に関して最も注目していることについての自分の意見・考え(1200字以内)

※書式は、いずれも縦A4判横書きとし、題名及び氏名を明記すること。パソコン、ワープロによる作成を推奨する。

※題名及び氏名は字数に含まない。

(2)提出先及び提出方法

内閣府政策統括官(共生社会政策担当)付国際交流第1担当(〒100-8970 東京都千代田区霞が関3-1-1 中央合同庁舎第4号館)へ郵送で提出する。

(3)締切り 平成18年5月31日(水)消印有効

(4)その他 提出書類は返却しない。

※参加が決定した場合は、情報交換のため、事務局が設定するメーリングリストに登録します。また、それに伴い、氏名を他の参加者に公開します。その他の情報については、必要に応じて、了解を頂いた上で公開します。

6 決定通知

選考の結果は、平成18年6月中旬に内閣府から本人に直接通知する。

更なる国際協調に向けて

～出会いから社会貢献活動の実施へ～

「21世紀ルネッサンス青年リーダー招へい」事業は、内閣府青年国際交流事業の40周年を記念して2001年よりスタートした事業です。

今年度は、平成17年10月6日(木)から19日(水)までの14日間、20か国から各国2名(2コース各1名)が招へいされ、実施されました。

本年の実行委員会を構成するにあたり、「21世紀ルネッサンス青年リーダー招へい」事業の既参加外国青年6名を新たに実行委員として迎えました。アドバイザー、ファシリテーター、日本人実行委員と共に、とてもすばらしい役割を果たしてくれました。

今回の総合テーマは「更なる国際協調に向けて～出会いから社会貢献活動の実施へ～」に設定されました。ITの普及や交通網の発達のおかげで、世界はますます国境なきものとなり、情報の送受信は以前より容易になり、国を越えた協力活動やコミュニケーションはより積極的に行われるようになっていきます。しかし、国際協力分野では、お互いの尊重と相互理解に基づいた国際協調の概念が十分に浸透していないようです。

そこで、本事業では、21か国から集まった社会貢献活動に取り組む事後活動組織に所属する参加者が、まず、国際協調についての共通認識をもつことを起点としました。そして、プログラムを通じ、視野を広げ、情報を効果的に活用するための知識を得るとともに、活動を推進するための実践力を身に付けることをねらいとし、参加者が、個人、グループ、または組織として、社会に影響を及ぼすような更なる国際協調につながる活動を意識しつつ実施することを目指しました。

本事業は総合テーマをふまえ、5部構成で実施されました。

- ① オープニングプログラム(東京)
- ② ヤング・リーダーズ・フォーラム(東京)
- ③ フィールド・トリップ(東京)
- ④ 地方プログラム(岩手県:NPOマネジメントコース/福島県:社会貢献活動コース)
- ⑤ グローバル・ユース・コンファレンス(東京)

① オープニングプログラム

開会式に引き続き「社会から求められているNPOの役割」をテーマに、パネルディスカッションが行われました。既参加外国青年実行委員(Ex-Ren OPY)のCarol Ann Lee(カナダ)をコーディネーターとし、Gunawan Zakki(インドネシア)、Vladimir Tamayo Mata(フィリピン)、Elham Alkhuoheji(バーレーン)、片桐広逸総務省大臣官房管理室参事官補、大河原友子(日本)IYEO副会長・SI(SSEAYP International)事務局長がパネリストを務めました。このパネルディスカッションでは、現代社会が抱える問題解決のためにNPOが果たすべき役割を考察し、世界にネットワークを持つ事後活動組織がどのような方向性を目指すべきかについての共通認識を得ました。



2 ヤング・リーダーズ・フォーラム

10月8日(土)～11日(火)(独)国立オリンピック記念青少年総合センターにて、日本人を含む21か国からの参加者が、各コース(NPOマネジメント、社会貢献活動)の専門性を高めるディスカッションを行い、ノウハウの共有や情報交換をし、社会貢献活動をいかに実施していくかを協議しました。



◆日 程/全体プログラム◆		
	NPOマネジメントコース	社会貢献活動コース
10月8日 (土)	オリエンテーション、全体アイスブレイキング、歓迎ランチパーティー	
	【コース別活動1】 コース・アジェンダの説明 アイス・ブレイク	【コース別活動1】 アイスブレイク、佐藤太アドバイザーによる基調講演「コミュニティへと舵をとる」
10月9日 (日)	【コース別活動2】 宿題の共有、ディスカッション 「マネジメント5つの要素について」 【コース別活動3】 特定非営利活動法人「パブリックリソースセンター」田口由紀絵氏による講演	【コース別活動2】 カフェスロー訪問 【コース別活動3】 Ex-Ren OPY によるプレゼンテーション 自身の活動のシェアリング
	【コース別活動4】 川上和久アドバイザーによる基調講演 「NPOにおけるPR戦略」 【コース別活動5】 事業計画策定、 中期計画作成ロールプレイ	【コース別活動4】 ディスカッション「問題の解決に向けて」 ブレインストーミング「今後、取り組みたい活動」 【コース別活動5】 ディスカッション「今後の活動計画」
10月10日 (月)		
10月11日 (火)	全体発表会、Sayonaraランチパーティー、トークセッション、評価会、 日本参加青年修了式	

ヤング・リーダーズ・フォーラム中の10月8日に、カシミール地方で地震が起きたことを受け、本事業の参加者が募金活動を行いました。
この活動は、本年度の総合テーマにちなんで「更なる国際協調に向けて～本事業参加者の協力による募金活動～」と名づけられ、参加者自身が企画し、実施しました。
募金活動は10月11日に行われ、それぞれが持ち寄った物品の売上金、福引きの収益金、寄付金の合計が¥78,806となりました。10月14日に日本青年国際交流機構(IYEO)は、既参加外国青年実行委員と共にこの募金を日本赤十字社本社へ届けました。
この募金活動は、短期間で企画実施されたものでしたが、本事業の参加者が、共に考え、実行していく中で、プログラムから学んだ事柄を実践する意義深い機会となりました。



3 フィールド・トリップ

各コースのテーマに即した現場視察、懇談を通じ、日本でのNPOマネジメントと社会貢献活動の現状についての理解を深め、外国参加青年が今後の活動の参考となるようプログラムを設定しました。

◆各コースのプログラム◆	
NPOマネジメントコース	社会貢献活動コース
・世田谷区立街づくりセンター訪問 ・振り返りとワークショップ	・新宿区立淀橋小学校訪問 ・早稲田商店会訪問 ・坂本達アドバイザーによる基調講演

4 地方プログラム

各コースのテーマに即した現場視察、懇談を通じ、NPOマネジメントの手法あるいは社会貢献活動の先進的かつユニークな事例を学ぶことにより、外国参加青年の今後の活動にも役立つよう企画しました。また、招へい国で行われている事例を紹介してもらう場も設定しました。ホームステイでは、日本の生活を体験し、人との繋がりを強めることを目的としました。

NPOマネジメントコース:岩手県

NPOマネジメントコースの岩手県プログラムでは外国参加青年が、東京のヤング・リーダーズ・フォーラムで学んだことを元に、実施体験の場として計5か所のNPOを訪問しました。プログラムのメインである3箇所*のNPOを訪問した後、NPOの活動維持と活性化を常に意識している地元の団体の方々と中身の濃いディスカッションができ、充実したプログラムとなりました。

ディスカッション後の発表では、各グループがNPOマネジメントの要素の1つを掘り下げて考察しました。

Aグループ：より効率的なNPOを目指すための「戦略的立案」

Bグループ：団体の運営と活動を支える「資金調達」

Cグループ：一般の人に団体の存在意義を伝え、支持を得るための「広報戦略」

さらに、3グループの発表を通じ「明確なミッション」と「資金調達」の2点がNPOにとって重要であることも認識しました。

外国参加青年は岩手県の訪問において、東京で得た知識をいかし、地元のNPO団体の方々とディスカッションができました。また、地元の団体や受け入れスタッフにとっても、新しいアイデアを吸収し今後の団体の活性化につながる場となりました。岩手県のプログラムをコーディネートくださった岩手県青年国際交流機構他、スタッフの皆様に心より感謝申し上げます。

環境パートナーシップ岩手

岩手に残された豊かな自然環境を次世代に引き継いでいくことを目標として平成16年12月に設立された団体。主な活動として「地域環境フォーラム」の開催、100万人キャンドルナイト、環境アイデアコンクール、その他勉強会やワークショップを実施。<http://eco.soc.or.jp/>

特定非営利活動法人 北上川流域連携交流会

平成12年に設立。北上川を軸とした地域間、官民の交流連携を通じて、豊かな自然を保全し歴史や文化を尊重しながら安全で楽しい水辺の創造をはかり、持続可能で市民の活力溢れる社会を実現することに寄与することを目的とする。主な活動の一つ「リバー・マスター・スクール」は、子供たちに自然への感謝の気持ちや、川の水をきれいに保つ重要性を伝えている。<http://www.kitakamigawa.or.jp/>

未来図書館

「社会を感じ取ることができたら、子供たちは自分で成長していける」というスローガンのもと、仕事に関する情報を収集し、職業体験の場を提供することにより、人々のニーズにあった就職や起業のサポートを目的とする。市民に対するビジネスや教育関連事業も展開している。

<http://www.miraitoshokan.com/2005project2.htm>



▲視察先別ディスカッションの成果をグループごとに発表

◆日 程/プログラム◆

日 程	内 容
10月13日 (木)	岩手県環境生活部長表敬訪問 いわてNPOサポートルーム訪問 市内散策 歓迎レセプション、ホストファミリーマッチング
10月14日 (金)	いわてグリーン・ツーリズム・サポートセンター訪問 NPO視察(3グループに分かれて) Aグループ:環境パートナーシップ岩手* Bグループ:北上川流域連携交流会* Cグループ:未来図書館* グループ毎にディスカッションと発表 地元青年との懇親会
10月15日 (土)	ホームステイプログラム
10月16日 (日)	ホームステイから帰着、歓送会



◀北上川流域連携交流会の皆さんと実地学習



▲市内散策で林檎農園を訪問

社会貢献活動コース:福島県

社会貢献活動コースの福島県プログラムでは、東京で学んだ内容を更に深めることを目的に、ディスカッションを中心とした活動が組み立てられました。到着した日は、障害を持つ人も安心して歩ける街づくりを目的に、地域住民や商店街への働きかけを行っているNPO法人シャロームを訪問し、代表のお話を聞く機会に恵まれました。2日目は、シャロームを含む4つのNPOの代表(それぞれ1~4名)とディスカッションを行い、若手ボランティア育成、ボランティアの活性化や継続、問題の解決方法、そして地域に根ざした活動を行うために私たちがするべきことなどについて話し合いました。

福島県のプログラムでは「地域に根ざした活動をするために私たちが取るべき行動はなんだろう」をテーマとして、ディスカッションを深めることができました。福島県において、広く地域とのネットワークを持ち、地域密着型の活動を行っている4つの団体の代表者を招いての意見交換を通じて、自国における社会貢献活動と、日本における社会貢献活動の相違点は何なのか、そして今後、私たちが目指すべき方向性は何なのか、などを十分に話し合うことができました。

多くの地元のボランティアやNPO関係者を招き、充実した活動を組み立てていただきました「船と翼の会ふくしま」の皆様へ感謝申し上げます。



▲ディスカッションの成果をグループごとに発表



▲NPO法人シャロームの代表とボランティアの皆さんとの懇談



▲興味のあるテーマに分かれて地元のNPO代表とディスカッションを深めた

関連団体紹介

シャローム

団体キャッチフレーズ:人と人を繋ぐ心のボランティア~やさしさに会えるまちづくり~
障害を持つ人も持たない人も共に生きる社会と地域づくりを目指し、自分の能力や特技を登録し会員として奉仕することを目的として2001年に設立された。福島市の委託事業として、「障がい者コミュニティサロン事業」の活動を展開している。 <http://nposhalom.net/>

福島大学震災ボランティア

福島大学の学生が中心となり、新潟県中越地震で被災され現在仮設住宅に入居している旧山古志村の方達全員が村に戻るまでの手助けをする。2005年11月には大学間のボランティア・シンポジウムを開催した。 <http://blog.livedoor.jp/sinsaibora/>

ふくしま・もりの案内人の会

県民と共に未来の森林(もり)のあり方を考え、もりと共生する環境づくり及び自然保護を柱に森林・林業体験、自然体験、自然観察など各種体験学習に意欲を与える支援活動を目的とする。森林(もり)との共生を基本とした活動を展開し、「森林(もり)に遊び・学び・働き・暮らす」をキーワードに、その環境づくりを実践する。四季を通して各種体験学習の場への指導者派遣などの活動を行っている。

鐵の学校

団体キャッチフレーズ:ものづくり、ひとつくり、環境・科学教育NPO
金属加工によるものづくりを通して、科学技術や環境について考え、学ぶ活動をしている。福島の若者のものづくり活動を促進させるべく活動を始めたが、まず「ものづくりはひとつくりから」と考え、若年者のキャリア・カウンセリング業務を展開。若年者就業支援促進員を中心にメンバーを集め「鐵の学校」を結成。2004年1月にNPO法人の認証を受けた。福島県教育庁「うつくしまふくしま夢まなびと連携講座」を受託。受託講座は2004年12月終了。連携講座として「科学実験講座かがくのタネ」「数学基礎講座さんすうからはじめるすうがく」を開催中。
<http://www.tetunogakko.com>

◆日 程/プログラム◆	
日 程	内 容
10月13日 (木)	福島県知事表敬訪問、 NPO法人シャローム訪問、 歓迎レセプション
10月14日 (金)	福島市民会館で地元NPO代表 とディスカッション ・シャローム ・福島大学震災ボランティア ・ふくしま・もりの案内人の会 ・鐵の学校
10月15日 (土)	ホームステイプログラム
10月16日 (日)	ホームステイから帰着、歓送会

5 グローバル・ユース・コンファレンス

全体発表会では、各コースのねらいに基づいて以下の発表を行い更なる国際協調に向けて各国の事後活動組織を活性化させることを確認しました。

NPOマネジメントコース

本事業を通して学んだNPOマネジメントの手法をいかに自国の事後活動組織の組織作りにかすか

2週間に及ぶディスカッション、講義、ワークショップ、視察を通じて学んだ理論的

で実践的なNPOマネジメントについて4つのパートに分けて発表しました。

1. 決意声明：NPOマネジメントコースの参加者が、事業で学んだことを共有し、事業を通じて得たネットワークを持続することを約束した声明文です。これは国連の声明文を手本としており、NPOマネジメントコースの要点や事後活動組織の展望を集約したものです。
2. ハンドブック：団体（または個人）が、活用できるNPOマネジメントの理論を、実践的な質問や活動紹介と組み合わせで作成したハンドブックです。NPOのマネジメントに必要な5つの要素（理念の共有、資金調達、人材育成、広報活動、戦略的立案）の概要の他、定義、評価手段、実践的なアドバイスが盛り込まれています。ハンドブックには、本事業のNPOマネジメントコースで習得した要点や、健全で充実したNPOへ発展するための戦略的計画の立て方が記載されています。
3. ケース・スタディー：NPOが直面しているいくつかの問題点（地理的環境、構成員数、連絡手段、資金面を含む）を取り上げ、それぞれの団体が2で説明したハンドブックを使用することで、各団体の強みや弱みを理解・評価し、将来、さらに活発な団体になるための計画立案について解説しました。
4. 戦略的立案：「子供たちの目を通して描かれる絵画」と題したプロジェクト（案）を使って、NPOマネジメントの5つの要素の1つである戦略的立案の事例を紹介しました。この戦略的計画は、団体の健全な運営と効果的なプロジェクト・マネジメントが関連していることを実証しました。

本コースでは、NPOマネジメントの複雑な概念や理論について深く学び、習得したことを実際に起こりうる状況に当てはめて考察しました。また、参加者は、本事業で学んだ事柄を自らの中にとどめておくのではなく、各自が所属する組織の中で実際に活用し、事後活動や地域社会の活性化にさらに貢献すべきであるとの思いを一層強くしました。



社会貢献活動コース

今後各国で取り組むべき国際協調につながる社会貢献活動

「なぜ、社会貢献活動か？」これは参加青年による討議の中心的な議題の1つでもありました。参加青年が導き出した結論は、まず、社会貢献活動は社会の発展を維持するために必要である、ということ。つまり、社会貢献活動とは、人と自然とのつながり、人と人のつながり、人と社会とのつながりなどの関係を再構築し、自給自足が可能なコミュニティを実現させ、グローバルな社会へと発展する力強い社会を取り戻す、といった現在地域で必要とされている課題に取り組む一助となりうるのです。また、このような取り組みをすることで、コミュニティに対する意識が高く、地域へ貢献する住民を生み出すきっかけとなるのです。

社会貢献活動コースの参加青年は、この事業の終了後に全参加青年が取り組むべき4つのプロジェクトの提案をしました。

1. 義援金募金活動
2. Our World: One World 子供たちが撮る写真の世界
3. Effective Social Leadership(ESL)リーダー育成プログラム
4. メール・パディー（文通）

社会貢献活動コースの参加青年は、2週間の事業での様々な活動や「世界青年の船」事業、「東南アジア青年の船」事業、「国際青年育成交流」事業の既参加青年と意見を交換することで、多くのことを学び、経験することができました。社会貢献活動を通して、私たちは世の中をより良い世界にすることに貢献できます。計画を実行し、そして「Think globally, act locally（意識は世界へ、活動は地域で）」を実現する努力をしていきます。今日の行動は、明日へとつながっているのです。

全体発表会でお互いの学びを共有した後、国別ミーティングと国別発



表を行い、本事業で学んだことをいかして社会貢献活動を行っていくために、各自が所属する事後活動組織とどのように連携していくかについて話し合いました。

本年度事業についての報告（英語）は以下のサイトを御覧ください。

<http://www.iyeo.or.jp/Ren/top.html>

<http://www.iyeo.or.jp/Ren/2005/report/index.html>

池上清子さん 第1回「東南アジア青年の船」事業参加青年



池上さんは第1回「東南アジア青年の船」事業（1974年）に参加され、大学卒業後は国連難民高等弁務官事務所、国連本部人事局、ジョイセフ（JOICFP:「家族計画国際協力財団」）に勤務、2002年9月にUNFPA（国連人口基金）東京事務所長に就任されました。現在のような国際舞台で活躍する素地となった学生時のボランティア活動や、国際公務員を目指されたきっかけ、現在のお仕事についてお話をうかがいました。

第1回「東南アジア青年の船」事業に参加されたきっかけについて教えてくださいませんか。

大学1年生の時、友人に誘われて日本赤十字の語学奉仕団に入り、ボランティア活動を始めました。語学奉仕団は、東京でパラリンピックが開催された時、海外からいらっしゃる身障者のお手伝いをするボランティア組織として始まりました。通常は、身障者施設を訪問して、英語劇を披露したり、英語の歌を歌ったり、英語を使って皆で楽しめるような活動を行っていました。

大学4年生の時、総理府（現在の内閣府）から各青少年団体に第1回「東南アジア青年の船」事業の実施について案内があったようで、既に青少年活動をしている人が応募の対象となっていましたので、私も応募しました。それは、勉強して身につけた知識ではなく、自分の体験から学んだものを持っていないと、交流する時に相手に提供できるものがないと思っていたからです。第1回の参加青年は、それぞれ自分なりの活動をしてきた人ばかりでしたので、交流していて本当に楽しかったですよ。

ターニングポイントになった先生の一言

その頃、赤十字語学奉仕団には、橋本祐子先生という有名な青少年リーダーがいらして、橋本先生は、赤十字の創設者であったアンリ・デュナンにちなんだ賞「アンリ・デュナン賞」を日本人として初めて受賞された方なんです。

私はここでボランティア活動とは何かを学びました。橋本先生がおっしゃったことで、いまだに心の中で復唱しながら仕事をしている言葉があります。それは、ボランティアは善意だけでは成り立たないということです。相手に提供できるものを自分が持っていなければならないのです。

「『誰かの役に立ちたい』と思っているだけじゃだめなのよ」と橋本先生はおっしゃいました。私はボランティア活動は熱意さえあればできると思っていましたから、これを聞いて頭をガーンと殴られたような気がしました。そうか、熱意だけではだめなのか、私はこれができます、と具体的に言えるように力をつけなければならないと痛感しました。私にとって、

これはまさにターニングポイントでした。**学生の頃から、ずっと仕事を続けようと考えておられたのですか。**

そうですね。でも私の母親は専業主婦でした。ですから、学校から帰ってくると、母親は家にいましたし、ケーキを焼いてくれていたりしました。そういう意味では、私は大変安定した子ども時代を過ごしたと思います。

ところが、私は自分のことは自分でやりたいほうでしたから、どんなことがあっても一生仕事を続けようと思うようになりました。これには父の影響もありました。

高校生の時、親に内緒でAFS（(財)エイ・エフ・エス日本協会:高校生の交換留学を実施）の試験を受けたところ、合格したのです。母は「女の子が1人でアメリカに行くなんて、絶対だめ」と言って反対しましたが、父は「男の子も女の子も関係ない。やりたいことがあればやればいい。けれども、自分の行動は自分で責任を取るように」と言って送り出してくれました。

アメリカに行ってもよかったのは、これまでなんとなく見ていた日本を客観的に見ることができるようになったことです。このような交流プログラムの利点は、他国を通して自分の国がどういうところかを振り返ることができ、自分は何を考えたかなければならないのかという問題意識を持てるようになることでしょう。

「東南アジア青年の船」事業での経験は、進路を決めるきっかけになりましたか。

ええ、国際協力の分野で仕事をしようと思ったのは、「東南アジア青年の船」やアメリカでの高校生活、語学奉仕団での体験がきっかけとなったのは事実です。アメリカでは自分は欧米の間人ではなく、アジアの一員だということを強く感じました。私がアメリカに留学した当時、アメリカはまだWASP(White Anglo-

Saxon Protestant)の世界でしたので、自分は有色人種であり、アジア人なのだと痛感しました。

ですから、「東南アジア青年の船」は訪問国がアジアだったので参加しました。他の地域だったら、おそらく興味がなかったと思います。

国際協力の分野で働くといっても、途上国関連の仕事でなくてもよかったのでしょうか、「東南アジア青年の船」に参加して東南アジアの現状を実際に見たこと、東南アジアに友人が大勢できたことで、途上国とのかかわり、特に、アジアとのかかわりを大切にしたいと思うようになりました。

例えば、最初の寄港地バンコクでは、ちょうど雨季でした。ホテルの前に水溜りができて、子どもたちがその中で素足で遊んでいるのです。不衛生な場所で遊んでいる子どもを見て、日本の状況とこんなに違うのはなぜだろうと思ったものです。この体験も私にとってはターニ

ングポイントとなりました。

大学ご卒業後、すぐに国際公務員になられたのですか。

卒業後は、大学の先生に紹介していただいた出版社に入社しましたが、私のやりたいことではないと思い、大学院に入ることになりました。この時点では、国連の職員を目指していましたから、そのために必要な修士号を取得するつもりでした。

ところが、問題があったのです。大学院の入試には第二外国語が必要なのですが、私は学部生の時に第二外国語を学んでいませんでした。社会科学科だったので、必要なかったのです。それに、必要最低限の単位だけをとる学生でした。

困ってしまって、試験だけでも受けさせてくれるよう嘆願書を書きました。合格した暁には必ず第二外国語を勉強しますからと。

おかげさまで合格しましたので、4月に入学してすぐにフランス語を取りました。このフランス語は、後にジョイセフに入って中南米で仕事をするようになった時に、役立ちました。もちろん、中南米ではスペイン語が公用語ですが、フランス語を学んでいなかったら、あれほど早くスペイン語が耳に入るようにはならなかったと思います。スペイン語を正式に学んだことはありませんが、リプロダクティブ・ヘルス(性と生殖に関する健康)の話なら、スペイン語でも問題なく聞くことができます。

英語では通じない

スペイン語圏でのプロジェクトの場合、英語では現地の人と話ができませぬ。スペイン語でないと通じないですね。しかし、社会的な弱者はマイノリティ(少数派)が多く、貧困層はインディオや先住民の人が多くな

ります。彼らと話をしようと思えば、スペイン語とはまた違った先住民の言葉が必要になります。私が身振り手振りを交えながら、ポツポツとスペイン語を話し、それを先住民の言葉に訳してもらったこともありました。

言葉以外で、気持ちが通じ合うこともありました。ジョイセフで仕事をしていた時、ある村で、母親と子どもの健康を促進するプロジェクトを行いました。私にも子どもがいることが共感を呼ぶようで、自分の娘の写真を見せると、「あら、かわいいわね」という具合に話が弾み、お母さんたちもずっと打ち解けて、同じ目線で話をすることができました。

直接会って話をすることの大切さ

直接会って話をする、相手の表情が見えますから、どんな人なのか、何を考えているのかがわかり、相手をよりよく理解できるようになります。このことは、イラクでの支援活動の時に痛感しました。

イラクで国連事務所が爆破され、職員が亡くなったことがありました。国連職員はヨルダンの首都アンマンに避難するよう指示され、それ以降はアンマン事務所でも業務を行いました。

当時、日本政府から700万ドルの資金が拠出され、母親と子どもの健康を守るプロジェクトを行っていました。

爆破された産科病棟を建て直したり、助産師さんたちを養成したりするものです。紛争下であっても、女性は妊娠して出産しますから、安全なお産のための介助ができるよう現地の人々を訓練するのです。

このプロジェクトについて、アンマン事務所にいるエジプト人の担当者と話し合うのですが、なぜかうまくコミュニケーションができませんでした。

私は夜中に何度彼に国際電話をかけ



「世界人口白書 2005」
平等の約束—ジェンダーの公正、
リプロダクティブ・ヘルス
そしてミレニアム開発目標
(国連人口基金)





たかわかりません。最終的には、お金をいただいている外務省に現地の状況をきちんと報告してもらいたかったこともあって、ヨルダンから日本に来ていただきました。

2人で外務省に行く前に、この事務所で彼と話をしました。すると、10分もたたないうちに、彼が何を考えているのかわかったのです。私たちは同じ方向を目指していることもわかりました。懸案事項はありましたが、話し合った結果、彼が「わかった。いくつかの選択肢を考えよう」と言ってくれました。2人で5つほどの

可能性を考え、それを外務省に提示しました。その結果、外務省がその中から1つを選び、問題を解決できたのです。

現在のお仕事についてお話しいただけますか。

今、UNFPAが重点地域として取り組もうとしているのがアフリカです。貧困人口も一番多く、これからも増えることが予想されるからです。

私は長く中南米にかかわってきましたので、援助がアフリカへ移っていくことに抵抗がありました。中南米ではいまだに大きな貧富の格差が見られます。例えば、メキシコでは、わずか5%の人が全体の富の80%を所有しています。つまり、残りの95%の人たちが、わずか20%の富を分け合っているのです。UNFPAが援助をする際には優先国（priority country）と優先地域（priority area）を考慮しますから、現在では、中南米、東欧、旧ソ連の予算がカットされ、アフリカに集中的に回されています。

日本がここまで発展してきたのは、底辺と呼ばれる層の生活水準が向上したからなのです。日本国内でも、一時期より格差は広がっていますが、それでも、貧富の差は世界的にみても比較的小さいですね。

途上国では、貧困層にきちんと援助が

行き渡るようにして、底辺を上げる必要があります。

最後に若者に向けてメッセージをお願いします。

50代半ばになった今、自分がなすべきことは、若者を育てることだと感じています。現在、世界人口の約半数は25歳未満の若者が占めていますから、彼らに働きかけ、自分たちは地球市民の一員なのだという意識を持ってもらい、彼らがあちこちの途上国で働くようになって欲しいのです。このような若者は、地球規模の問題に取り組んでいく際に大きな力になります。

個人的には、女性のほうが途上国の状況を理解してくれるように思います。女性は子どもを生み、育てるという役割がありますから、他人のつらい状況に共感できることが多いのかもしれないね。

いずれにせよ、このUNFPA東京事務所が若い人にとっての「止まり木」のようになってほしいと思っています。若いボランティアたちには、ここで開発にかかわる能力を身につけ、世界に羽ばたいていてもらいたいものです。

～インタビューを終えて～

複数の講演会と海外出張を間近に控えたお忙しい時期だったにもかかわらず、快く取材に応じてくださいました。これまでさまざまな国際機関で行ってきた仕事には、無駄な経験は1つもなく、すべてが役に立ってきたというお言葉から、池上さんのお仕事にける思いが伝わってきました。笑顔のたえることのない明快なお話しぶりに、さわやかな気持ちで国連ハウスを後にしました。

池上さんの講演会が開催されます！

国際理解セミナーのご案内

講演テーマ：「ミレニアムMDGs (Millennium Development Goals) とは？」
～国連における開発援助の実情について～

日 時： 2006年3月21日(祝)

会 場： 六本木ヒルズ内 六本木アカデミーヒルズ49階「オーデトリウム」
セミナーに関するお問い合わせ・ご連絡先 (財)青少年国際交流推進センター
TEL:03-3249-0767 FAX:03-3639-2436 e-mail:seminar@lyeo.or.jp

UNFPA東京事務所長として国連の活動の第一線で御活躍されている池上清子氏に、2000年の国連ミレニアムサミットで採択された「国際的公約」であるMDGsを中心に、国連における開発援助の実情についてお話しいただきます。

To The Next Generation — エドに捧ぐ

日本青年国際交流機構会長

第7回「東南アジア青年の船」事業 参加青年

第22回「東南アジア青年の船」事業 ナショナル・リーダー 田中南欧子

第7回「東南アジア青年の船」事業(1980年)の25周年記念同窓会が、9月にタイのバンコクで開かれ、4か国から既参加青年や関係者を含む80名が参加しました。10月には、当時の管理部員と既参加青年25人が横浜でうれしい再会を果たしました。どちらの会にも家族や友人が加わり、SSEAYPの魂が次世代の交流へと受け継がれることを実感しました。

1980年9月27日、雨の晴海埠頭を出航した日本参加青年(JPY)36人。それぞれのターニングポイントとなる船出でした。10月6日にシンガポールに上陸。当時5か国だったASEANの参加青年たちとの出会い。Eメールのない時代ですから、事前の情報は皆無でした。

あの時から25年もたったなんて!バンコクのアジアホテルに

参加者が集まった時、会場はものすごい騒ぎでした!特に、タイ同窓会のチャイ会長やチャイワット、ビシット両前会長のホスピタリティーには心から感謝。各国で準備にかかわってきたメンバーたちも本当にうれしそうでした。ついにこの日が来たのだ!

きっかけは、2002年8月にマニラを訪ねた折、船を下りてから初めてエド・パティと再会できたことでした。彼と私は、音楽の担当で指揮をしたりしていたので親しく、JPYの歌った滝廉太郎の「花」を彼はとても気に入り、私は手書きの楽譜をプレゼ



▲22年ぶりの再会
(マニラのフォート・サンチャゴにて)

参加青年 志田和隆 (平成17年9月3日~6日 バンコク)

第7回「東南アジア青年の船」事業(1980年)の同窓会をバンコクで開催。地元タイからは記念パーティに家族やOB、今年度の乗船者など約30名が参加。シンガポールからは家族同伴者を含め約30名。マレーシアから女性3名。日本からは田中南欧子IYEO会長、僕、そして僕の妹の3名。残念ながら、インドネシア、フィリピンからの参加はなかった。

思い出話と近況報告、友人や家族の紹介等で話は尽きなかった。政財界やアカデミズム界で重要なポジションに就いている者も多いが、みな普通気さくなまま。NGOや地域社会でのボランティア活動に対する意識が高いことが嬉しかった。僕の妹は、国際的な環境NGO「グリーンピース」の東南アジア地区の理事兼事務局長としてバンコクに赴任中だったので、同席した。

◆主なスケジュール◆

- 9/3 リユニオン・パーティ(Asia Hotel)
- 9/4 Kanchanaburiバスツアー
クワイ川橋、戦争博物館(映画「戦場にかける橋」の舞台で有名)
クワイ川Dinner Cruise
- 9/5 MBD(Moo Ban Deg)子供学校村
(機械、裁縫、PC、マッサージの職業訓練、有機農業畑)
Srinakarin Dam(「映画」007の舞台)
- 9/6 さよならパーティ



すぐに思い出せない顔も(Asia Hotel)

9月4日~6日はカンチャナブリへバス旅行。クワイ川では屋形船3~4倍大の船でパーティも。皆40~50代にもかかわらず、歌って踊ってジョークの披露バトルで笑いっぱなし。あの陽気な乗りは日本文化にはない。25年前が再現されたような楽しい旅だった。一方、親のいない子供向けコミュニティの活動に感動し、寄付やグッズ購入で多くが支援者になった。

当時、あまり話す機会がなかった人とも今回は話せて、あらためて敬意と親愛の念を憶えることが度々あった。友情と思いやりのすばらしさを再認識するイベントとなった。

第7回「東南アジア青年の船」事業 副管理官 野角計宏

よく「同じ釜の飯を食う」ことの重要性が言われます。この点では「東南アジア青年の船」事業(以下「東ア船」)はもってこいの内容だと思います。

ただ、「東ア船」は「同じ釜」というより「るつぼ」のような気がします。まさにいろいろなものがつぼの中でミックスされ、外側からいくつかのプログラムという形で少し熱すれば、内から新たなものが生まれてくる。このエネルギーこそが、本日のように25年ものつながりを持続させる原動力だと思うのです。

管理部として、参加青年へのお膳立てはしますが、やはり、青年が自ら積極的に取り組もうというやる気が一番重要ですね。

ントした思い出があります。

久しぶりに会って、フォート・サンチャゴやリサール・パークを歩きながら、3年後に25周年のリユニオンをやりたいね!と話が盛り上がりました。その後、シンガポール、マレーシア、タイ、日本でEメールなどを駆使してメンバーを探し出し、呼びかけていきました。

やっと具体的なプログラムができた昨年4月、エドが肺がんのため亡くなったという悲報が届いたのです。あんなに同窓会を楽しみにしていた彼がなぜ?こんなに早く!



◀25年前のアルバムを見て談笑する参加者(横浜)

バンコクと横浜の同窓会会場にエドも一緒にいたような気がします。私たちは、彼の3人の子供たちのために募金をし、奥様に送りました。いつか彼らがSSEAYPのPPY(フィリピン参加青年)となって、私たちの子供たちと一緒に海を渡る日が来ることを信じています。



▲特別に用意された「にっぼん丸」ケーキ

参加青年 橋本かおり (平成17年10月8日 横浜)

「東南アジア青年の船」事業(以下、「東ア船」)に応募したきっかけは、既参加青年だった大学の先輩から紹介されたことです。私は小学生の時、アメリカに住んでいたこともあって、高校生のころまでは欧米に目が向いていました。

しかし、大学1年の学園祭の時に、先輩がとても楽しそうに東南アジアの人たちを案内しているのを見て、私は東南アジアについては何も知らないということに気がきました。それで、その先輩に教えてもらってさっそく応募しました。

当時、ASEANは5か国でした。それぞれの国に特色があって、違った文化の中で豊かに暮らしているのがとても印象的でした。私は帰国子女で、海外で暮らしたこともありましたが、アジアにはこれまで私が経験したことのないものがあつたのです。普段考えたこともなかった「日本もアジアの国の1つなのだ」という事実を認識することができました。

結局、私は渡米して米国の写真家と仕事をするようになり、アジアではなく、欧米に戻ってしまうのですが、それでも「東ア船」はその後の私の人生に大きな影響を与えました。

例えば、「東ア船」に参加した4年後、英国科学探検協会のオペレーション・ローリーに参加。イギリスから科学探検船に乗り、米国、バハマ諸島へ行きました。「東ア船」をきっかけに、船に病みつきになってしまったのです。船が大好き。海にいるのが大好きになりました。





派遣で得た仲間と日韓のつながり



平成16年度「日本・韓国青年親善交流」事業(第18回)参加青年
第2回日韓交流連絡会議 日本側実行委員長

中村 恵美子



実行委員長挨拶をする筆者 ▶

日韓交流連絡会議は、「日本・韓国青年親善交流」事業の既参加青年たちが、参加年度を越えて仲間の絆や日韓交流への想いを共有し、さらなるネットワークを広げる目的で開かれています。今回は日本から17名、韓国から23名、計40名の既参加青年が集いました。

2005年9月3日(土)・4日(日)の2日間、韓国・釜山市にて第2回日韓交流連絡会議(以下、連絡会議)が開催されました。公式日程は3日からとなっていたのですが、韓国側の厚意で2日から日程が組まれており、2日には韓国青年の案内による釜山市内観光を楽しみました。3日午後には参加者が続々と集まり、開会式・アイスプレイングでお互いの緊張をほぐしていきました。参加年度の異なるの仲間との交流には、最初はとても緊張していましたが、少しずつ慣れていきました。

プログラムは日本・韓国両方の参加者が入り交じったグループでの行動が主になりました。グループ別討議では、日常生活や教育の面から見た「日韓の共通点・相違点」や、「連絡会議の発展のために」といったテーマについてディスカッションをしました。普段感じていること、派遣時の思い出や、事後活動で気づいたことなどを織り交ぜながら、日本語や韓国語でそれぞれが熱く意見をかわしました。

夜は国別に分かれ、派遣事業参加後の活動やこれからの連絡会議をどのように作り上げていくかについて話し合いました。そのあと、近くの公園から夜景を見たり、部屋でおしゃべりを楽しんだりし、第1日目終了しました。

翌4日は前日のグループ別討議、国別会議の結果を報告し、意見交換の場を設けることができました。お互いの意見を聞いて、全体で成果を共有することで、今後の活動に繋げていくことができると思います。

このようなディスカッションや会議を通し、派遣時にはあまり目を向けられなかった問題や、もう一度考えさせられることなど、勉強になることがたくさんありました。しかし何よりも、懐かしい仲間たちに再会できたことや、初めて会う仲間たちと同じ空間を共有できたことがとても楽しく、あっという間に時間が過ぎていきました。

2日間という短い日程ではありましたが、同じ事業に参加した仲間たちが集い、意義深い行事になりました。実行委員会結成から会議開催まで2か月、時間がない中での準備となりましたが、日韓両実行委員が積極的に意見を出し合い、懸命に準備したことで、40名もの既参加青年に集まってくることができました。まだまだ多くの問題点や課題がありますが、これから大きく発展していく可能性を感じています。

今回もIYEOの公式行事として開催させていただき、田中会長の挨拶文を頂戴することもできました。最後になりましたが、関係者の皆様方の多大な御協力に対し、篤く御礼申し上げます。



▲ 日韓併せて40名の既参加青年が集った

第2回日韓交流連絡会議に参加して

平成16年度「日本・韓国青年親善交流」事業(招へい)参加青年
雀 孝勳 (チェ・ヒョフン)



▲ グループ別討議の様子

連絡会議を行うという話を聞いたときから、私はとても楽しみにしていました。しばらく会っていなかった先輩たちに会うことができ、また他年度の参加者にも会うことのできる機会だったからです。当日の朝、釜山駅に到着し、ひとり、ふたりと集まる度にお互いの近況を聞きあったり、派遣当時の話をしたりしながら、日本での思い出が次々に浮かびました。

グループ別討議は、今私たちが抱えている問題と解決案を深く考えるよい機会になりました。私はKIYEO (※)

も大きく成長していて活発な活動ができると考えていたため、このような時間がなければ、活動について特に考えることはなかったかもしれません。国別会議では、連絡会議の意味とKIYEOの過去と現在、未来について初めて知り、私たちが直面している状況について理解を深めました。全体会議では、私が考えていたよりはるかに多く意見が出され、その内容に驚いたり、共感したり、心配したりもしましたが、すべてこれから解決できることだと信じています。

閉会식을最後に、2日間の会議は幕を閉じました。短かったけれど、参加者みなが忙しい時間を割いて集まったことを考えると、決して短くはない2日間でした。思い出とすばらしい参加者との出会い、今後の期待まで、たくさんのことを得ました。2日間尽力してくださったすべての方々(特に実行委員のみなさん)に感謝し、来年は、今年参加できなかった方々も一緒に参加できればと思っています。

(※KIYEO…招へい事業参加青年による韓国国内での事後活動組織)

■主なプログラムと日程

9月3日(土)	15:00	開会式
	16:00	アイスブレキング
	17:00	グループ別討議・夕食
	21:00	国別会議
9月4日(日)	9:00	全体会議
	11:00	共同体活動・昼食
	13:30	閉会式

▶ 続々と集まる参加者たち
(受付の風景より)



事後活動組織による災害復興活動支援

マクロコズム vol. 66 (2005年9月号) でもお知らせしましたが、「スマトラ島沖地震復興募金」で集められた寄付金がタイの「東南アジア青年の船」事後活動組織 (AASEAY: Association of the Ship for Southeast Asian Youth of Thailand) と、スリランカの「世界青年の船」事後活動組織 (SWYAA Sri Lanka: The Ship for World Youth Alumni Association - Sri Lanka) へUS\$3,000ずつ渡されました。その後、スリランカから寄付金を使った復興支援活動の報告がありましたので、お知らせします。

組織名	通貨	寄付金額
第17回「世界青年の船」事業	米ドル	2,763.00
	オーストラリアドル	220.00
	ニュージーランドドル	125.00
	日本円	265,628
アメリカ合衆国「世界青年の船」事後活動組織 (SWYAA-USA)	米ドル	355.00
メキシコ合衆国「世界青年の船」事後活動組織 (SWYAA-Mexico)	米ドル	1080.00
日本青年国際交流機構 (IYEO)	日本円	494,474

Report from Sri Lanka (スリランカからの報告)



Introduction

The Tsunami that hit most of South Asia has left a trail of unimaginable devastation. Sri Lanka has been one of the worst hit countries, with over 30,957 lost (statistics as at

25th Jan) and over a million displaced. The Ship for World Youth Alumni Association Sri Lanka has identified for itself projects of helping who have lost everything due to devastating Tsunami.

Past Projects

The SWYAA-Sri Lanka conducted following projects by March 2005.

- 1) Delivering 20,000 food packets to Tsunami affected areas.
- 2) Delivering clothes (used and new) for five thousand people.
- 3) Distribution of water tanks to Tsunami affected areas.
- 4) Counseling

Providing Materials to Students Affected by Tsunami

The community project organized by the SWYAA-Sri

はじめに

南アジアを襲った津波は想像を絶する被害の爪痕を残しました。スリランカはその中でも最も大きな被害を受けた国のひとつで、30,957人の尊い命が失われ、数百万人が住む場所を失いました。スリランカ「世界青年の船」事後活動組織はこの津波の被害で全てを失った人々を支援する活動を立ち上げました。

2005年3月までの活動

1. 被災地域に20,000個の食料パックを寄付
2. 5,000人に洋服 (新品・古着) を寄付
3. 被災地域に水のタンクを配布
4. カウンセリング

被災地の子供たちへ学用品の寄贈

2005年6月21日にスリランカ「世界青年の船」事後活動組織が主催する地域活動が、ガレ地域スリ・ブッダハシンハラマヤ・ペリウエナで実施されました。スリランカ「世界青年の船」事後活動組織の会員が、図書館へは家具と本を、ダンマ学校の30名の生徒に対しては学用品を寄付しました。約20名の会員がこの活動に参加し、プロジェクトは成功を

右頁へつづく

Lanka was held on 21 June 2005 at Sri Buddhasinharamaya Piriwena Galle. All members of the SWYAA-Sri Lanka donated books and furniture to the library and delivered student materials among thirty students in the Dhamma School. Around twenty members participated to this event and were able to complete the project successfully. A number of other projects are to be launched in near future.

Scholarship for the Children

The second project was launched on 1 August to provide scholarship (US\$5 per month and school materials) to 25 students for 1 year.

Project Coordinators (プロジェクト・コーディネーター)

- 代 表 Thushara Deepal Dias Dahanyake
第14回「世界青年の船」事業参加青年
Project Leader / President, SWYAA-Sri Lanka
- 事務局担当 Buddhika Chamikara Wijerathna Iddamalgoda
第14回「世界青年の船」事業参加青年
Co-coordinating Secretary

左頁のつづき

収めました。今後も引き続き、活動を行っていく予定です。

子供たちへの奨学金

2005年8月1日にプロジェクトの第2弾が実施されました。これは、25名の生徒に対し1年間、毎月5ドルの奨学金と学用品を支給するというものです。

詳細はホームページをご覧ください。

<http://www.swysrilanka.org>



	Income (収入)	Expenses (支出)
IYEO/SWYAA Contribution (IYEOとSWYAAからの寄付)	Rs. 43,900	
Cupboard (戸棚)		Rs. 12,000
Books (本)		Rs. 8,500
Transport (移動費)		Rs. 6,400
Clothes (洋服)		Rs. 4,000
Exercise Books (練習帳)		Rs. 2,000
Camera and Battery (カメラと電池)		Rs. 350
Gifts (ギフト)		Rs. 5,000
Banner (バナー)		Rs. 800
Other Expenses (その他雑費)		Rs. 350
Balance (残高)		Rs. 4,500
TOTAL (合計)	Rs. 43,900	Rs. 43,900

ヨルダン大使と楽しむヨルダン料理

第21回「東南アジア青年の船」事業参加青年
 第27回「東南アジア青年の船」事業管理部員
 第32回「東南アジア青年の船」事業管理部員
 平成17年度 国際青年育成交流事業（ヨルダン）副団長
 立原 公美子

国際青年育成交流事業の出発前研修2日目（2005年9月3日（土）於（独）国立オリンピック記念青少年総合センター）に、在日ヨルダン・ハシュミテ王国のサミール・ナウーリ大使が、ヨルダン料理を持参して、壮行会に出席してくださいました。

ほとんどの団員が初めて食べるヨルダン料理のおいしさと、自ら料理を取り分けてくださる大使の気さくなお人柄に触れ、和やかな雰囲気の中、あっという間に料理を平らげてしまいました。

料理をいただきながら、日本人の奥様との出会いについてうかがったり、料理のお礼に団員のパフォーマンス「よさこ

いソーラン」やアラビア語の歌を披露したりし、出発直前にヨルダン文化に触れ、日本文化を紹介するよい機会となりました。

当日、持参してくださったお料理のレシピをヨルダン大使館からいただきましたので、ご紹介します。



スフィーハ（ヨルダン式調理パン）

材 料(20枚分)

ひき肉（鶏肉または牛肉）…500g	タイム……………小さじ1	①
トマト（種を除いておく）…3個	ナツメグ……………小さじ1	
パセリ（刻んでおく）…2カップ	ブラックペッパー……………小さじ1	
玉ねぎ……………1個	飾り用 松の実……………20粒	
塩……………大さじ1	小型のパン……………20枚分	
オリーブオイル……………大さじ3	（食パンでも可。5～6枚分）	

material



作り方

How to cook

1. トマト、パセリ、玉ねぎをそれぞれ細かく切る。
2. ①の材料をひとつに合わせておく。
3. 細かく刻んだ1と①を合わせ、別に用意した小型のパン生地(注)の上のせ、中央に松の実を飾る。
4. 200度に熱したオーブンに入れ、約10分間焼く。

(注) 写真では丸い小型パンを使っているが、食パンを軽くトーストしたもので代用できる。



「第7回青年の船」の集い開催について御案内します!!

船を降りて32年の歳月が過ぎ去りました。

私たちはその歳月の経過とともに年齢相応の姿かたちにはなりましたが、あの時の熱き思い「ひろい海 ひろい空 ひろい心の結びつき」を今も追い求めて毎日を生きているように思います。

さて、昨年6月に花巻市で開催されました集いの席上、来

年は富山で集まろうと約束してお別れをしましたが、いよいよその時を迎えます。

再会する場所は、富山県を代表する立山の地です。

なつかしい仲間を囲んでのひと時、温泉と雪の立山を味わってみませんか。

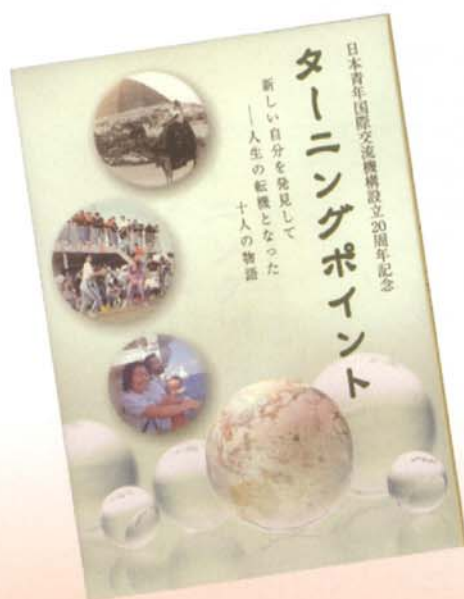
と き 平成18年6月3日(土)～4日(日) / ところ 富山県 立山町 立山山麓温泉「グリーンビュー立山」

詳細についてのご案内は3月初旬に致します。まずは忘れないよう手帳に予定を書いて下さい。

坂東(管理部)、荒木(2班班長)、岡田(13班班長)、稲場(2班)、和泉(9班)、大田(14班)、福島・永田(16班)、中西(17班)、岡本(24班)の富山のメンバーが皆さんを待っています。この件についての問合せは永田俊満(16班)

電話(自宅)0763-32-3134へ

「ターニングポイント」が完成しました!



マクロコスム11月号でもお伝えしましたように、「ターニングポイント」が完成しました。日本青年国際交流機構設立20周年記念企画として、2004年11月号より、内閣府(総理府/総務庁)の国際交流事業に参加したことが人生のターニングポイントになった既参加青年にインタビューし、さらに数名の方にもあらたにご登場いただき、合計10名の方々の活躍ぶりを1冊の本にまとめました。

頒布価格は1冊¥1,000です。送料は1冊¥160、3冊まで¥210、10冊以上の場合は無料です(1箇所のみ)ご希望の方は、送料を加えた代金を以下の口座にお振込みください。入金が確認され次第、発送します。

郵便振替口座番号: 00140-3-73972

振込先: 日本青年国際交流機構

申し込み: TEL: 03-3249-0767

e-mail: macrocosm@iyeo.or.jp

～讃岐まんてがんでん通信～

香川青年国際交流機構 井川 美紀

皆さん、昨年11月に宮城県で開催された全国大会には参加されましたか?風光明媚な松島にて、工夫を凝らした様々なプログラムや懇親会を堪能し、充実した2日間を過ごしましたね。実行委員の皆さん、お疲れ様でした!

さて、気の早い話ですが、次回の全国大会は、平成18年12月2日(土)、3日(日)に香川県は琴平町での開催が決定しています。宮城での全国大会には延べ260名を超える方が参加されましたが、香川にもこんなにたくさん来てくださるのかな?と少し不安と焦りを感じました。ここ数年、香川は「うどん」で知名度を上げていますが、それだけで食

い付いてくれるのかと…。

そこで、香川のいろいろなことを紹介し、香川に行ってみたいなあと思っただけのよう、香川PRの記事を毎月掲載させていただくことになりました。うどん以外にも、こんなおいしい物があるよ、こんな観光名所があるよ、こんな人たちがいるよ…と、香川のまんてがんでん(讃岐弁で「全て・全部」という意味です!)を毎回お届けしたいと思います。

是非、毎回ご一読いただき、全国大会にご参加下さいますよう、よろしくお願い致します。



今月号の表紙

グローバル・フォト・コンテスト

🏆 (財)青少年国際交流
推進センター理事長賞
受賞作品

「うれしはすかしパースデー」

山浦和徳(SWY16)



編集後記

新しい年を迎え、気持ちもあらたに1月号の制作に取り組みました。帰国したばかりの参加青年に次年度国際交流事業の募集用原稿の執筆をお願いしたところ、



快く応じてくださいました。中には、こんなたくさんの思い出をこんな少ない字数では表現できない!と言う方もあり、その熱意に圧倒されそうでした(ふ)

MACROCOSM 1月号 Vol.68

2006年1月31日発行(隔月発行)

編集 マクロコズム編集委員会

発行 財団法人 青少年国際交流推進センター

〒103-0013 東京都中央区日本橋

人形町2-35-14 東京海苔会館6階

TEL 03-3249-0767 FAX 03-3639-2436

e-mail : macrocosm@iyeo.or.jp

URL : <http://www.centerye.org>

(CENTERYE)

<http://www.iyeo.or.jp> (IYEO)

編集協力 内閣府政策統括官(共生社会政策担当)

日本青年国際交流機構 (IYEO)

定価 215円(本体205円)

印刷所 柏木印刷株式会社

TEL:03-5395-3954 FAX:03-5395-8213

since
1884
Pioneer Of
Cruise



USPH—米国公衆衛生業は米国に入港する客船に対して毎年検査を行って衛生検査を実施しています。にっぽん丸は、2000年から3回連続して100点満点の99点を取るなど、日本船では最高の評価を5年半の間受け続けています。



冒険する生活
にっぽん丸



ボクにとっての**にっぽん丸**は、
人間形成の場でもあるのです。

にっぽん丸ホテルサービスクルー—小林 義治

長い旅を終え、お客さまが下船された船では、ホテルサービスクルーたちが一斉にキャビンの掃除にとりかかる。ベッドメイクを担当していた彼が、ふと、枕元に目をやると一枚のメモ用紙が…「毎日お部屋をありがとう。おかげ様でとても快適な旅でした」。小林義治が新人時代に体験した忘れ得ぬエピソードだ。「ほんとに涙が出ました。これですべての苦勞が報われたなど」。客船に乗って日もまだ浅い新人たちにとって、長期クルーズにおける毎日は辛い。小林もまた例にもれず、日々先輩たちから叱咤され、身の細る思いで毎日過ごしていたという。「礼儀や順序、手際など、今考えれば社会人として当たり前の事ばかりなんですけどね。それがなかなか上手くない。しかも陸と違って、ここでの暮らしは憂さを晴らす逃げ場もない…。そんな折に、お客さまから頂戴した思いがけないメッセージ。「今でも大切に持っています。あのメモは、これまで何か辛いことがあるたび心の支えにしてきたボクの宝物ですから」。そんな小林も今では、一つのチームを取りまとめる優秀なリーダーだ。にっぽん丸での5年という歳月は、彼を立派な大人に育てた。

もてなしにも、品質があります。にっぽん丸の船旅

<p>花の南房総と伊豆諸島クルーズ 名古屋発着</p> <p>名古屋→館山→神津島→名古屋 2006年3月6日(月)～3月9日(木) 108,000円</p>	<p>春の瀬戸内海周遊クルーズ 神戸発着</p> <p>神戸→(瀬戸内海)→神戸 2006年3月10日(金)～3月12日(日) 86,000円</p>	<p>屋久島・甕島クルーズ 博多発着</p> <p>博多→屋久島→甕島→博多 2006年3月13日(月)～3月16日(木) 110,000円</p>
<p>小笠原スプリングクルーズ</p> <p>横浜→小笠原(父島)→横浜 2006年3月19日(日)～3月24日(金) 198,000円</p>	<p>鳥島周遊アホウドリ・ウォッチングクルーズ</p> <p>横浜→(鳥島周遊)→横浜 2006年3月26日(日)～3月28日(火) 82,000円</p>	<p>2006年世界一周クルーズ</p> <p>横浜・神戸発着(各101日間)19ヶ国25港 2006年4月6日(木)～7月16日(日) 2,900,000円</p>

そのほかのクルーズもご用意しております。表示の代金はステートルームC1室を2名でご利用の場合の大人お一人様・国内クルーズは消費税込の旅行代金です。


商船三井客船
〒107-8532 東京都港区赤坂1-9-13 三井客船ビル5F MOPASは船船三井客船の登録です。

お問合わせは、各クルーズ取扱旅行会社またはMOPASクルーズデスクへ。

クルーズデスクフリーダイヤル
☎0120-791-211

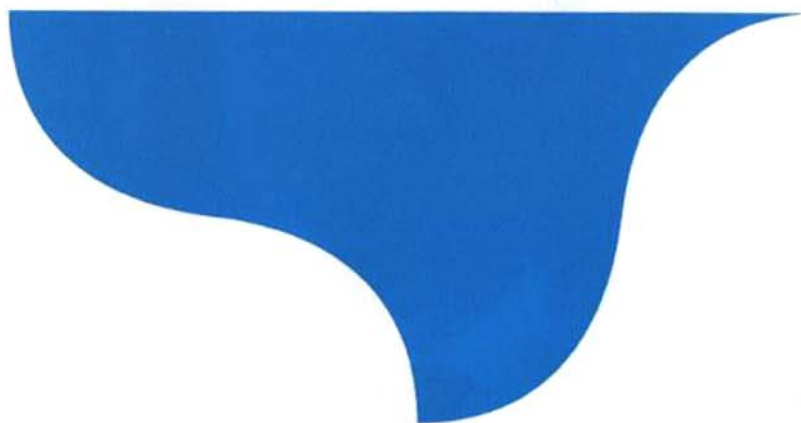
<http://www.mopas.co.jp>



東急観光から

トップツアーへ

～ 夢へ翔びたつ青い鳥。わたしたちがトップツアーです。～



TOPTOUR

2006年1月31日、創立50周年、

「東急観光株式会社」は「トップツアー株式会社」へ社名を変更しました。

いま私たちは新しい未来へ向かって羽ばたき始めます。

The 50th Anniversary



トップツアー株式会社

国土交通大臣登録旅行業第38号 ©日本旅行業協会正会員・ボンド保証会員

〒153-8550 東京都目黒区東山3丁目8番1号 <http://www.toptour.co.jp> <http://www.toptour.jp>